

『沖縄芸術の科学』第33号別刷

在欧沖縄紅型コレクションと 日本の美術館所蔵品との比較

柳 悦州

2021年3月

在欧沖縄紅型コレクションと 日本の美術館所蔵品との比較

柳 悦州

A Comparative Study of Okinawa Bingata Collections in Europe and Japan

Yoshikuni YANAGI

During the period 2017-2019, surveys of Okinawa textiles were conducted at the Museum der Kulturen in Basel, Switzerland and at the Wereldmuseum Rotterdam in the Netherlands. During the surveys, it was discovered that among the Okinawa bingata textiles, a number of fragments either matched those in Japanese museums (Suntory Museum of Art, Joshibi University of Art and Design Art Museum, Okinawa Prefectural University of Arts Museum, etc), or, although not matching exactly, bore close relationships to those in Japanese museums. The article will introduce the surveyed materials, consider the various contexts, and argue for the need for comparative research on the collections.

1. はじめに

筆者は、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵鎌倉芳太郎紅型型紙資料、同紅型染見本と紅型裂資料の調査研究（以下鎌倉資料と記す）、財団法人日本民藝館所蔵沖縄染織品（以下民藝館染織資料と記す）の調査研究を行ってきた。それらはデータベースを活用して調査データを蓄積すると共に、報告書として発刊してきた¹。

さらに2017年より筆者等は在欧の沖縄染織品調査研究を継続してきた²。最初はバーゼル（スイス）のMuseum der Kulturen Basel（以下MKBと記す）所蔵の113点の沖縄染織品について、チューリッヒ大学トムセン教授、MKBと共

同調査を行った。その過程で、MKB 所蔵品がどのような経緯で所蔵されたのか、蒐集の一端が明らかになった。また、所蔵品の中には、日本に所蔵されている紅型裂と近似する資料のあることがわかってきた。

在欧沖縄染織資料がどのような基準や理由によって選択され蒐集されたのか、また在欧沖縄染織品と日本・沖縄に所蔵されている沖縄染織品にはどのような差異があるのであろうか。これらを明らかにする事ができれば、沖縄・日本・ヨーロッパにおける美意識の違い、在欧沖縄染織品コレクション成立過程の一端を明らかに出来ると考えている。

これらの課題を解明するため 2019 年度科研費「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」³の助成により、トムセン教授を研究協力者として、在欧沖縄染織資料調査を行っている。2019 年度はドイツ・クレッフエルド市染織博物館、オランダ・ロッテルダムの Wereldmuseum Rotterdam (以下 WMR と記す)において筆者等は、在欧の博物館が所蔵する沖縄染織品調査を行ってきた。その過程で、複数の博物館に近似する資料があること、日本の博物館にも、同様に近似する資料のあることがわかってきた。

2. 目的

そこで、本研究では、特に紅型裂に注目し、在欧紅型資料と日本・沖縄の紅型資料の関係性について、実物資料の観点から明らかにしようと考えた。在欧紅型資料と日本の紅型資料を比較検討し、近似する資料について詳細な検討を行い、両者のコレクション成立の関係性について比較研究の端緒としようと考えた。

3. 資料の概要

本論文では 3,615 点のデータを元に検討を加えた。データは、下記に示すように筆者等が調査を行った資料 (①～⑥)、さらに文献や各博物館がインターネット上に公開している資料等からデータ化した資料 (⑦～⑫)、文献史料 (⑬～⑯)が含まれる。以下にその概要を記す。

紅型調査資料

国内資料

- ① 鎌倉資料（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵、型紙、紅型見本、紅型裂）2168点
- ② 日本民藝館紅型資料（型紙、紅型、紅型見本、ウチクイ）417点
- ③ 沖縄県立博物館・美術館所蔵俵屋染織帳（調査中⁴）45点
- ④ ホノルル美術館所蔵俵屋染織帳（調査中、以下Hawaii俵屋資料と記す⁵）152点

在欧資料

- ⑤ MKB（Museum der Kulturen Basel）所蔵紅型資料 39点
- ⑥ WMR（Wereldmuseum Rotterdam）所蔵紅型資料 71点

博物館公開資料

- ⑦ サントリー美術館 129点
- ⑧ 東京国立博物館 15点
- ⑨ 九州国立博物館 9点
- ⑩ 女子美術大学美術館 47点
- ⑪ 金沢美術工芸大学附属図書館 101点
- ⑫ 沖縄県立図書館東恩納寛惇染織資料 50点

文献史料

- ⑬ 『王朝のいろとかたち』（2012年 サントリー美術館）に集録された紅型資料

沖縄県立博物館・美術館	62点
那覇市歴史博物館	37点
松坂屋美術館	45点
静岡市立芹沢銈介美術館	20点
故宫博物院	29点
沖縄美ら島財団首里城公園	28点
個人蔵（藤原氏）	1点

- ⑭ 『紅型 古琉球』（1928年 山村耕花 巧藝社） 36点

- ⑮ 『Textile JAPAN』(2018年 Thomas Murray コレクション、Prestel (London) 発行) 43点
- ⑯ 『ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書』(2013年 祝嶺恭子 沖縄美ら島財団) 71点

4. 方法

上記①から⑯の資料について、新たに紅型統合データベースを作成した。

出典、所蔵先、所蔵番号、模様一覧、地色、資料名称、所蔵先資料名称、画像、関連情報、備考等のフィールドを設定した。

紅型統合データベースには、今までに調査したデータ(鎌倉資料・民藝館染織資料)を統合し、さらに在欧沖縄染織資料調査データを加えた。また、直接調査していないものの、公開されている各博物館のインターネット公開資料や書籍等からも、公開データを入力すると共に、画像より必要な模様情報を読み取り入力した。

MKB、WMRの調査データ入力時に、データベース全体から関連するデータを検索し、模様等が近似する資料については関連情報としてその所蔵番号を入力した。

さらに、在欧紅型資料であるMKB、WMRの紅型裂を対象に、関連情報をもとに、同一資料あるいは近似すると考えられる他所蔵品をさらに検索し、画像を詳細に比較検討した。

5. 結果

MKB、WMR所蔵の紅型資料を対象として、比較検討した結果、下記が明らかとなった。

- (1) 同一裂を分割したものであろうと考えられ、分断部分が無理なくつながる資料(連続する同一裂)6種(写真1～6)を見つけた。
- (2) 同一裂を分割したものであろうと考えられるが、分断部分がつながらない資料(連続しない同一裂)が6種(写真8～13)あることが確かめられた。
- (3) その他、同一裂と考えられるが、詳細な調査を行う必要のある資料も数点確認できた。

6. 考察

同一裂と考えられる資料

同一裂とは、同じ紅型裂資料から複数に分けられたと考えられる紅型裂であり、模様が矛盾無くつながる資料と、模様がつながらないが同一資料と考えられる資料があった。

(1) 同一裂で矛盾無くつながる資料を写真1～6に示した⁶。

写真1 MKB5353 と女子美裂 0003

写真2 WMR40314 と同 40802、40785 3点

写真3 WMR 40777 と Hawaii 俵屋 9460-2

写真4 WMR 75919 と WMR 75945

写真5 WMR 75930 と WMR 75940

写真6 WMR 75946 と WMR 75954

写真1～6に示した写真は、同一の裂が2点(図3では3点)に分割された資料である。画像で分割部分を観察すると、生地ゆがみはあるものの、染め付けられている模様は矛盾無く連続することが判別できた。写真7には、写真1で示したMKB5353と女子美1103-0003の分割部分の拡大画像を示した。模様が無理無く連続することがわかる。

したがってこれら写真1～6に示した資料は、当初連続した裂地だったものが、分割して所蔵された資料と考えられる。

写真1の資料では、MKBと女子美に分割され所蔵されている資料である。写真3の場合は、WMRとホノルル美術館で分割所蔵されている。これらの資料では、日本で蒐集時に分割されたものと考えられる。写真2、4、5、6では同一の所蔵先で所蔵番号が異なる資料である。ヨーロッパに渡った前後に分割され、その後所蔵品が統合された資料であると考えられる。

(2) 同一裂だが、つながらない資料

写真8 WMR 40313 と 女子美裂 1103-0019：左端縫い跡が共通しており同一資料が複数に分割されたものと考えられるが、切断面の模様は連続しない。両者と

の間に別の裂が存在すると考えられる。

写真9 WMR 40781 と WMR 75903：同一資料と考えられるが分割部分が一致しない。欠落部分の幅はおよそ3cmである。蒐集地に別の資料として切り分けられたと考えるより、汚れや破損、着物仕立ての状況で同一資料が裁断されたと考えの方が妥当であろう。

写真10 WMR 40782 と WMR 75963、鎌倉資料（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術史料館所蔵）357：同一資料と考えられるが分割部分が一致しない。WMRの資料は両者とも横幅9cmであり、着物の縫製を解いた後の端布であろう。鎌倉資料357も、地色の焼け具合から衽部分を解いた裂であろう。三者とも同一の着物から分けられたと考えられるが、模様はつながらない。

写真11 MKB 4789 と WMR 75964、サントリー 73-43：同一な模様部分の断片である。模様と配色が共通しており同一資料を分割したと考えられる。同一資料と考えられる裂が WMR と MKB に所蔵されている例である。どちらも斜めに裁断された部分があり、衽の上部と考えられるがつながらない。写真10同様に縫製を解いた後の端布であろう。

写真12 MKB4797 と WMR 75968：同一裂と考えられる。模様の配色は共通しているが、染分地の雲部分の配色のみ異なっている。染分地で地色の配色が異なる例⁷もあり、この両者が同一裂である可能性も否定できない。

写真13 WMR 40791 とサントリー 73-15-1:同一裂と考えられるが、サントリーの裂は実見して調査を行っておらず、さらなる調査が必要である。

(3) 同一裂と考えられるが追加調査の必要な資料

上記12組の資料以外に、同一裂であろうと推定できるものの、調査を行って確度を上げてから報告すべき資料も10組前後みられた。それらは、画像上の比較では同一資料とおおむね判断できるが、実物資料の調査を行って布の形状や繊維の状態等のデータをもとに判断すべきと考えている。

本稿では、MKB・WMR所蔵の沖縄染織品の中で、特に紅型裂に着目し、それ等の中に日本のコレクションと同一裂あるいは近似する裂がないか検討してきた。

写真1～13を概観すると、MKBとWMRに所蔵される紅型裂のうち、日本

に関連する資料が所蔵されているのは、女子美術大学美術館、サントリー美術館、沖縄県立芸術大学である。また写真3では、WMRとホノルル美術館所蔵俵屋染織帳との関係も明らかとなった。

MKB、WMRの主な沖縄染織品は、1956年前後にオランダ人美術商J. Langewisから購入された⁸ので、1950年代蒐集のコレクションである。女子美術大学美術館、サントリー美術館、沖縄県立芸術大学はどのような経緯で現在のコレクションが成立したのであろうか。詳細は科研費によって新田が現在研究を行っている⁸。

須藤⁹によれば、女子美術大学美術館のコレクションは旧鐘紡繊維美術館が所蔵していた。それ以前1952年に鎌倉芳太郎は旧鐘紡繊維美術館へ沖縄の衣裳を売却した。現在女子美術大学美術館が所蔵する沖縄の染織品コレクションの中で、紅型裂は19点である。紅型衣裳は鎌倉芳太郎より入手したが、紅型裂の所蔵時期、入手経路は明確な記録が現在の所見つかっていない。これらも鎌倉芳太郎から入手した可能性があり、今後の研究課題である。在欧コレクションの成立時期と、旧鐘紡繊維美術館が紅型コレクションを入手した時期はほぼ同時期である。Langewisがこの同じ時期に日本で紅型を入手し、コレクションとしてMKB・WMRへ送った可能性も十分に考えられる。また、沖縄県立芸術大学のコレクションも鎌倉芳太郎旧蔵品である。

サントリー美術館の紅型コレクションの蒐集時期および入手先については、現時点では不明であり今後の研究課題である。また、詳細な実物資料の調査も必要である。

本稿では、在欧紅型裂について、連続する同一裂と連続しない同一裂について明らかにした。詳細な資料調査の必要と共に、コレクションの成立や来歴研究も同時に必要であり、両者を総合的に考え比較検討を行う重要性を明らかにできた。

従来、在欧の沖縄染織資料の詳細な調査研究は、祝嶺恭子による研究¹⁰のみであり、今後も継続した詳細な在欧調査研究が必要である。また沖縄・日本の各美術館等の所蔵資料との比較研究やコレクションの成立に関する研究等も重要であり、様々な視点から総合研究を行うことで沖縄の染織文化の特徴を明らかに出来ると考えている。



写真 01 (上: MKB5353
部分, 下: 女子美 1103-
0003)



写真 02 (上: WMR 40314
部分, 下左: 同 40802,
下右: 同 40785)

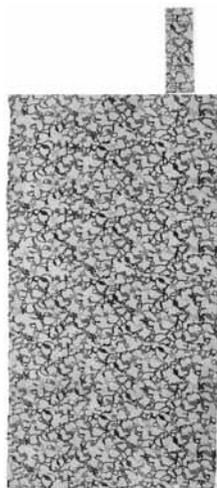


写真 03 (上: Hawaii
俵屋資料 9460-2, 下:
WMR 40777 部分)



写真 04 (上: WMR
75919, 下: 同 75945 部分)



写真 05 (上: WMR
75930, 下: 同 75940)



写真 06 (上: WMR
75954 部分, 下: 同
75946)

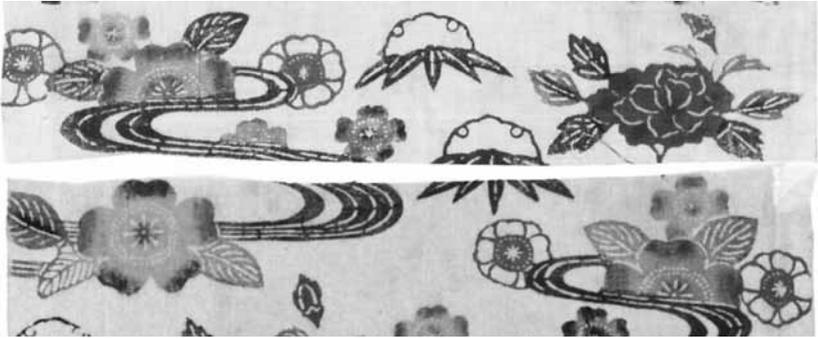


写真7 写真1の分割部分拡大。上下の様子が矛盾無く連続する。

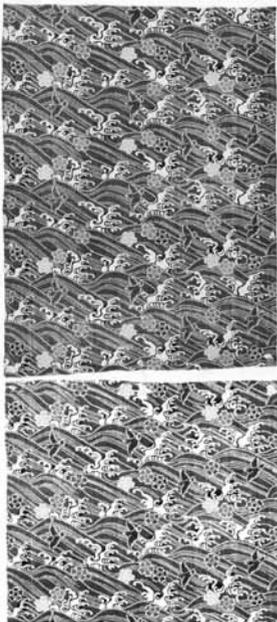


写真8 (上：WMR 40313,
下：女子美 1103-0019 部分)



写真9 (左：WMR 40781, 右：同 75903)



写真10 (左上：鎌倉 357 部分, 左下：WMR 40782, 右：同 75963)



写真11 (左：WMR 75964, 中：MKB4789, 右：サントリー 73-43)

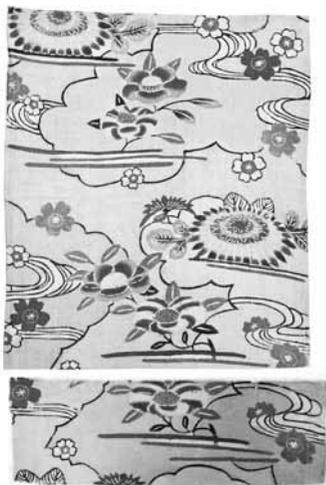


写真12 (上：MKB4788, 下：WMR 75968)



写真13 (左：サントリー 73-15-1, 右：WMR 40795)

謝辞

本稿掲載の資料のうち、現地調査をさせて頂いた Museum der Kulturen Basel、Wereldmuseum Rotterdam、沖縄県立博物館・美術館、ホノルル美術館所蔵俵屋染織帳資料写真を提供頂いた與那覇一子氏（沖縄県立博物館・美術館学芸員）に厚く御礼申し上げます。

注

- 1 鎌倉芳太郎資料については
『鎌倉芳太郎資料集 第1巻 紅型型紙(1)』沖縄県立芸術大学附属研究所
2002年
『鎌倉芳太郎資料集 第2巻 紅型型紙(2)』沖縄県立芸術大学附属研究所
2003年、『鎌倉芳太郎資料集 第3巻 紅型見本・裂』沖縄県立芸術大学附属研究所 2015年
日本民藝館所蔵沖縄染織品については
『日本民藝館所蔵沖縄染織品第1巻 田中俊雄蒐集 沖縄織物裂地』沖縄県立芸術大学附属研究所、2016年
『日本民藝館所蔵沖縄染織品第2巻 沖縄の織物』沖縄県立芸術大学附属研究所、2017年
『日本民藝館所蔵沖縄染織品第3巻 紅型』沖縄県立芸術大学附属研究所、2018年
を編集・刊行した。
- 2 在欧沖縄染織コレクションの調査は、筆者の他、新田摂子（沖縄県立芸術大学附属研究所講師）、平田美奈子（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）が中心となって行ってきた。ヨーロッパ側共同研究者は、ハンス・トムセン（チューリッヒ大学教授）である。
- 3 2019年度科研費「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」（国際共同研究強化（B））、研究代表者：柳悦州、研究分担者：新田摂子（沖縄県立芸術大学附属研究所講師）、平田美奈子（沖縄県立芸術大

学附属研究所共同研究員)、海外共同研究者:ハンス・トムセン(チューリッヒ大学教授)。

- 4 沖縄県立博物館・美術館所蔵俵屋染織帳は、復帰前後に蒐集されたが詳細は不明。沖縄染織小裂が張り込まれたアルバム状の小裂帳であり、3冊ある。現在調査中であるが、撮影画像を紅型統合データベースに取り込んだ。
- 5 ホノルル美術館所蔵俵屋染織帳は、沖縄県立博物館・美術館学芸員與那嶺一子氏が1995年に現地調査し撮影した。同氏よりスライドフィルムの提供を受け、紅型統合データベースに画像入力し、画像から知り得る情報を加えた。
- 6 写真01～13のキャプションで、所蔵先名称に続く番号は、各々の所蔵先の所蔵番号である。ただしHawaii俵屋資料は調査中であり調査番号である。
- 7 沖縄県立博物館・美術館所蔵「木綿染分地遠山霞に菊水模様紅型衣裳」(『王朝のいろとかたち』p.58)では、地色の配色が場所によって異なっているのが確認できる。
- 8 新田摂子「在欧沖縄染織コレクションの形成について 日本の美術館所蔵品との関連性より」(2020 沖縄染織研究会通信 Vol. 104)では、日本本土の沖縄染織コレクションがどのような経緯によって成立したのかを明らかにしている。
- 9 須藤良子「女子美染織コレクションにおける沖縄の染織品調査」(2011 女子美術大学研究紀要 pp.45-63)
- 10 祝嶺恭子『ベルリン民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書』(2013 一般財団法人 沖縄美ら島財団)